

鹿児島港（桜島フェリーターミナル）周辺巡りマップ

鹿児島港の文化財

鹿児島港本港区は、藩政時代から明治にかけて、多くの岸岐（岸壁）や波止（防波堤）が築造された。これらの施設は、そのほとんどが、後の埋立や改修工事等で姿を消していくが、新波止、一丁台場及び遮断防波堤は、昭和57年の港湾計画改訂で、緑地に取り込み保存することとされ、現在でもその姿を見ることができる。


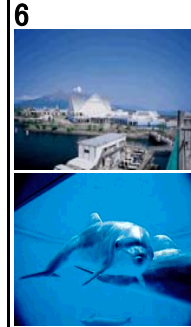


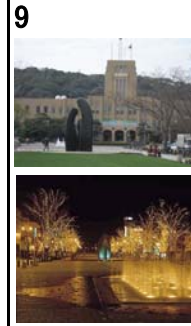



中でも、最古の「新波止」は大砲船の訓練拠点として整備され、薩英戦争（1863年）時には砲台17門を備え、英国船に向けて発砲したと言われている。昭和61年に着手された本港区再開発では、石積防波堤の海側が埋め立てられ、緑地公園の護岸として生まれ変わった。ここには、遊歩道も設けられ、鹿児島港の歴史上果たしてきた役割を歩いて顕彰することができる。









鹿児島港旧港施設（新波止、一丁台場及び遮断防波堤）は、鹿児島港の代表的遺構であり、港湾技術史上、高い価値があるとして、平成19年12月4日付けで国の重要文化財に指定された。








また、鹿児島旧港北防波堤灯台は、大正・昭和の大改修（大正12年～昭和9年）で築造された北防波堤の先端に昭和9年に整備された。昭和61年からの本港区再開発で、北防波堤は埋め立てられたが、灯台は当時のままウォーターフロントパークに保存され、その姿形から「赤灯台」として親しまれている。

鹿児島旧港北防波堤灯台は、鹿児島港修築工事の代表的遺構の一つであり、国土の歴史的景観に寄与しているとして、平成20年3月7日付けで国の登録有形文化財に指定された。

	<p>重要文化財 新波止（しんはと） 新波止は、別名新台場とも言われ、その築造の正確な年代・沿革は不明。弘化・嘉永年間（1844～1853）に築造され、薩摩藩主・島津吉彬公の代に、軍備拡張時に根本的に改築された。それ以前は、波除け程度の構造であったが改造し、台場とした。江戸時代末期には珍しい、沖合に造られた石積み防波堤である。薩英戦争（1863）の時には砲台を備え、英国艦隊を迎え撃ったと言われている。</p>
	<p>重要文化財 一丁台場（いちちようだいば） 一丁台場は、別名沖ノ岸岐（おきのがんぎ）と言われ、明治5年に波浪を防ぐ目的として築造され、その後桜島の大火噴火の被災を受けたが、修復を行い現在に至る。</p>
	<p>重要文化財 遮断防波堤（しゃだんぼうはてい） 新波止と一丁台場をつなぐ接合部として、明治37年に築造された。</p>
	<p>登録有形文化財 鹿児島旧港北防波堤灯台（かごしまきゅうこうきたぼうはていとうだい） 鉄筋コンクリート造りで、四角形平面とする旧ガス発生室の上に、六角形平面の鉄骨造灯塔を建て、頂部には円形の踊り場及び換気口付きの灯籠を付ける。総高は11m。旧内務省が実施した鹿児島港修築工事の代表的遺構の一つ。</p>

	<p>ボードウォーク（しおかせ通り） 周辺の散策や、ベンチに座って桜島フェリーなどが行き交う港の風景を眺めたりして過ごすのも楽しいスポット。</p>
	<p>かごしま水族館 いおワールド 鹿児島を取り巻く美しい海の素晴らしさ、その海に暮らす生きものたちの生態を余すところなく紹介する観光スポット。館内はジンベイザメの泳ぐ「黒潮大水槽」、溶岩トンネルを抜けると亜熱帯から温帯に住む珍しい生きものが目の前に迫る「かごしまの海」、人気者のラッコが遊ぶ「ラッコ水槽」や世界最大の淡水魚「ピラルクー水槽」などがある。また、錦江湾で発見された謎の生物サツマハオリムシを見ることができる。</p>
	<p>明治天皇行幸碑 1872年、明治天皇が初めて行幸し、その地は鹿児島であった。上陸に利用された新波止には記念碑が建立された。明治天皇は鹿児島城（鶴丸城）に入れ、島津久光らに会い、磯地区の工場群の見学も行っている。</p>
	<p>赤倉病院（あかくらびょういん）の跡 英国人医師ウィリアム＝ウイリスは、イギリス公使館付医師として日本にやって来て、生麦事件では負傷者を手当てしたり、薩英戦争では軍艦に乗って鹿児島に来航した。また、鳥羽・伏見の戦いでは、薩摩藩の負傷者の治療にもあたった。ウイリスは鹿児島の医学校に院長として迎えられる。1869年、医学校は小川町へ移り、病院は滑川そいの赤レンガづくりの洋館に移ったが、この病院は窓が小さく、倉庫のように見えたので、赤倉病院と呼ばれた。ウイリスは多くの医学生を育て、鹿児島の近代医学の先覚者となった。</p>
	<p>みなと大通り公園 市役所から鹿児島本港へ続くみなと大通り公園は、街路樹と噴水とオブジェが織り成す都心のオアシス空間。特にクリスマスの季節には、木々がイルミネーションで飾られ、ライトアップされたオブジェが夜空に浮かび上がって、ファンタジーの世界を創り出す。なお、みなと大通り公園を含む易居町一帯は安永年間（1772～80年）の埋め立てと言われ、御殿（現在の国立病院機構鹿児島医療センター）まで続いていた堀には多くの帆船が来航していたという。</p>
	<p>太平洋戦争民間犠牲者慰霊碑 昭和49年に「戦災により非命にたおれたはらからの痛恨をおもひあすのためにこの碑を建つ」として、鹿児島市と南日本新聞社により建立されている。</p>
	<p>国道58号 国道58号線は、那覇市から沖縄本島を南北に貫く、沖縄の大動脈であるが、実は、奄美大島、種子島を経て鹿児島市に至る国道である。総延長距離は248.1kmであるが、そのうち鹿児島市部分はわずか0.7kmしかない。</p>
	<p>五代友厚（ごだいともあつ）銅像 1835年生まれ。才助といった少年時代から、世界地図の模写や地球儀の制作で、海外への関心を高めた。1857年に長崎に留学。1862年には藩命で幕府の千歳丸に乗船した。1865年には「薩摩藩英国留学生」を率いて、イギリスに渡り、蒸気船や紡績機械の購入に奔走した。帰国後は海軍に従事し、明治新政府では参与に任命されたが、後に官を辞して実業界に転身。1878年に大阪株式取引所（現大阪証券取引所）と大阪商工会議所（現大阪商工会議所）を設立し、自ら会頭に就任して、精力的に商都大阪の発展につくした。1885年、49歳で没。大阪商工会議所の前にも銅像がある。</p>

	<p>月照上人遺跡の碑 僧月照が1858年、幕府の追求をのがれ、西郷を頼って薩摩にやって来た時に泊った旅館「俵屋」のあったところ。</p>
	<p>石燈籠（いしとうろう・いづろ） いづろ通りの一角にたっている石燈籠は、南林寺（現・松原神社）の参道にたっていたもの。航路標識という説もある。いづろの名はこの石燈籠にはじまる。いづろ通りは、幕末から大正期には、大店舗が建ち並び、鹿児島城下で最も繁栄した通りだったという。</p>
	<p>マイアミ通り いづろ交差点からドルフィンポート前に連なる通り。鹿児島市が姉妹提携しているアメリカの南東端フロリダ州にある都市にちなんでいる。マイアミは、カリブ海クルージングの拠点であり、海の玄関口、気候も温暖であるなど鹿児島市と共通点が多い。</p>
	<p>登録有形文化財 鹿児島銀行本店別館 鹿児島銀行本店別館は1918年竣工した、本県最古の鉄筋コンクリート造建築物。以前は本店として利用されていたが、本店新築に伴い別館となり、現在は福利厚生施設として利用されている。</p>
	<p>広馬場（ひろばば）通り 広馬場通りは、名山町、金生町、堀江町といった市の中心部を南北に貫く通りである。現在は電車通りの発展によって裏通りと化してしまっているが、その歴史は古く、かつては金融機関や老舗店が軒を連ねるメインストリートであった。また、往時を偲ぶ建築遺産や名山町の個性的な街並み、さらにみなと大通り公園への接続という多彩な空間の魅力を持っている。</p>
	<p>ユニークな鹿児島市電 1912年12月に開業した鹿児島市電は、軌道の中央に架線柱（センターポール）を建て、普通ならクモの巣のように張りめぐらされている架線をそこに収めている。最近岡山や熊本などで導入されているが、鹿児島はその先駆けで、これによって無理に右折する車が減り、定時運行に大きく貢献している。また、線路が敷設されている部分に芝を植えるという、世界的に見てもまれな試みがなされており、ヒートアイランド現象の軽減に効果を発揮している。2013年には、鹿児島国際大学の学生が発案した観光電車「でんでん」も運行を開始した。</p>
	<p>ボサド棧橋 ボサドの名の由来は、地蔵角近くに「二十三夜勢至菩薩（二十三世イシボサツ）」という菩薩堂があったことから、ボサドの名が付いたと言われている。鴨池港に移る前は、ボサド棧橋は垂水行きフェリーの発着地であった。</p>
	<p>桜島フェリーターミナル 鹿児島のシンボル、桜島まで15分。桜島観光の拠点。フェリーは24時間運航なので、夜の錦江湾や市街地の夜景もまた格別。ちょっとしたクルージングで非日常の気分を気軽に味わえる。</p>

	<p>名山堀（めいざんぼり） 市役所から東南、すぐ近くに「名山堀」と言われる場所がある。昭和のテーマパークのような懐かしい雰囲気を出しているここには、古いけど安い、昔ながらの居酒屋が軒を連ねている。名山堀はその名の通り、鶴丸城の堀であった。戦後間もない頃は、物資の集積地であり、多くの人で賑わっていた。昭和40年頃までに全ての堀が埋め立てられ、名山町の町名が誕生した。</p>
	<p>イルカ水路 「イルカ水路」は最も水族館に近い北エリア、中央エリア、さらにドルフィンポート前の南エリアからなり、全長275m、面積7000㎡となっている。かごしま水族館のイルカたちは、水族館のプールを飛び出して、ときどき「イルカ水路」へ遊びに来る。ここで、イルカたちは自由に泳いだり、トレーニングをしたり、遊んだり、いろいろなこととして水路での時間を過ごす。水路の中にいる生きものを追いかけたり、ポートといっしょに泳いだり、プールの中とはちがった動きも見てくれることもある。</p>
	<p>旧町 向江町（むかえちょう）の碑 明治4～昭和42年の地名。明治4年に向築地から向江町になる。上町の向こうに位置するまちという意味に由来する。昭和20年の大空襲の後、鹿児島駅とともにいち早く復活し、戦後の鹿児島の復興を支えた。昭和42年11月に浜町の一部となる。</p>
	<p>旧町 生産町（せいさんちょう）の碑 明治7～昭和40年の地名。明治5～6年の埋め立てにより、南は名山堀の野上橋を挟んで築町、北は阿蘇橋を挟んで小川町、西は易居町に接し、東は港に面していた。昭和40年7月に易居町・小川町の一部となる。</p>
	<p>石蔵倉庫群 鹿児島港は薩摩藩時代から奄美、沖縄、台湾、中国等との航路が発達し、明治40年には国の重要港湾の指定を受けている。従って港の背後地には荷物保管場所としての倉庫が必要とされた。現存する石造平屋建ての倉庫群は大正から昭和初期にかけて建造された。石蔵は本来の穀物等農産物の貯蔵庫として使用されているものがある他、最近では、店舗・喫茶店・食堂等に活用されている。</p>
	<p>ドルフィンポート足湯 鹿児島市の観光の名所であるドルフィンポート内にある足湯。雄大な桜島と波静かな錦江湾という、眼前にすばらしい景観を楽しみながら気軽に足湯に浸かっていたら、身も心も癒せる所である。</p>
	<p>南風の泉（かぜのいづみ） ドルフィンポートとNHK鹿児島放送局の間に位置し、最大15mの高さまで噴水する「大水柱」が見所である。大水柱は毎時0～5分、30分～35分、噴水トンネルは15～21分、45～51分に見ることができる。</p>

参考文献

- ・鹿児島港のみなと文化（田村省三）
- ・鹿児島市ホームページ
- ・鹿児島市教育委員会案内板等

発行

〒892-8520 鹿児島市小川町3番56号
鹿児島地域振興局総務企画部総務企画課
099-805-7206